

井深対談

超感覚・繰り返し・吸収力

七田 真(しちだ・まこと)

昭和4年生まれ。児童教育研究所長・0歳教育友の会
会長。昭和26年頃から“脳力”についての研究にう
ちこみ、大正初期に出版された『英才教育の理論と実
際』により、「才能逡限の法則」を知る。昭和53年七
田幼児教育研究会設立以来、島根県江津市を本拠として、
幼児教育一筋。著書に『0歳教育の秘密』(学生出版社)
『赤ちゃんはみな天才』(日経通信社)他がある。

五感を超えた感覚

井深 私が先生にお願いしたいのは、潜在意識と顕在意識というものについて、もうちょっと素人にぴんとくるような例でも挙げて説明していただくと、非常に分かり易くなるということと、それから、能力逓減の法則の、数字の出どころをはっきりしてほしい。

七田 音のほうでは、絶対音感の木下達也先生の仕事がございましたね。

井深 鈴木鎮一先生も、逓減の法則については言っておられたんですね。我々、幼児開発の仕事をやっている者には分かるのですが、もっと、みんなに分からせるということ、ぜひやっていただきたいと思うのです。

やっぱり逓減の法則というのを、しっかり分かって何かをするのと、ただ小さい時からやったらいいというのとでは、ずいぶん違いますよね。

七田 ソビエトではノボシビルスクという方が、「能力の効果的発達の可能性の不可逆的消滅」というややこしい名前、逓減の法則のことを言っているんですね。ハントというアメリカの教授も同じようなことを言っておられるし…。

私は講演の時には具体的な例で逓減の法則の話をするんです。仙台に広瀬幼稚園という、音楽に非常に熱心な所がありまして、毎年音楽発表会をなさる。ある年、園児たちにベートーヴェンの「第九シンフォニー」の「歓びの合唱」というのを原語で歌わせた時、1番先に覚えたのが3歳です。4歳児は覚えるのにちょっと苦労して、5歳児になるとどうしても覚えられない子が出てきたんです。そういう実例がある。

井深 そういう集団の数字をとらないとうそでしょうね。データをとり易いプログラムを考えて、数字を各幼稚園で出してくださいというふうにして…。

七田 絶対音感の能力もそうですが、運動の能力にも逓減の法則があるんですね。

私は、運動の能力は遺伝で、後からやっても、あまり変わらないだろうと思っていたんです。

その考え方で、上の子供の時は、走ることもなにかしないで育てたんですね。ところが、下の子供たちは逓減の法則があることに気づいて、1歳、2歳から走らせた。そうしたら、親の素質とは関係なしに、足の速い子供たちが育ちました。

ですから、上の2人は遅く、気をつけた下の2人は、非常に走るのが速い。

井深 今、幼児開発協会のほうにご協力願っている、青木宏之先生という武道家がおられます。その先生は人の気配を感じずという、“気”の非常にすぐれた人なんですが、新体道という体術の創始者なんです。

その“気”というのはどういうことかと言うと、その先生が向こうを向いて座っている。後ろから刀でわっと斬りつける。そうすると、すつとよけちゃうんです、斬る前に。見ていると、どいたところを斬っているみたいに見えるんですけど、それを4年前、筑波で開いた「科学・技術と精神」という国際シンポジウムでやりました。それを見たって、恐らく外国人には分からないだろう、というのが私の考えだったんですが…。そうしたら案

の定、セミナーが半日間でつぶれちゃうくらい大騒ぎになったんです。インチキだとか本当だとか言って。

それで結局、私、サゼストしまして、脳波をとろうじゃないかと。斬る人も斬られる人も脳波をとって、後で波形分析したら、きれいに波が同一時刻に出ているんですね。

そこで、私はこの“気”の問題を子供にやっごらんないよって、言ったんです。そしたら、それを新潟県の長岡の幼稚園で、3歳児と4歳児と5歳児にやってみた。それで、やったことは、特別の学習も何もなし。1日前の日に青木先生が行って、正座の形みたいなのと、精神統一できるようなことを教えて、それから、新聞紙を丸めて、園児に向こうを向かせておいて、後ろから叩くんですよ。それをどれだけよけられるか。そうしたら、3歳児は100%みんなよけられる。4歳児になると88%。5歳になるともう68%。大人は、と聞いたら、5%以下、厳密には3%だと言われるんですよ。老若男女を問わずね。これなんか、もうちょっとまとめていくと、遞減の法則にぴったりだ。

だから、胎児までいけば、どうしても超能力の問題になってくる……。

七田 私は、幼児の潜在意識には、大人にはない3つの不思議な能力があると言っているんです。1つが今出た超能力と、2番目がパターン認識力ですね。3番目がコンピューター的能力。

井深 超能力と言っはいけないんですね。当然ある能力 -。

七田 五感を超えた、超感覚と言っると分かり易いかもしれない。

それと、井深先生も書いておられますけれども、論理的な考え方が進むようになると、そういった感覚は消えていく。ですから、脳に障害を持った子供の場合は、むしろ超感覚が非常にすぐれている。

井深 それから、漢字なんかにしても、漢字を教える場合に、石井勲先生も七田さんもそういう表現をしておられるけれども、顔だの目だのという身近で意味の分かるものはすぐ覚えるという、その点が、私と違うところです。子供の覚え方は、どうも我々が思う覚えるという感覚ではない気がするんです、さっきおっしゃった特別の感覚ですから。覚えるのに、よりどころがあるというのも、もう既に左脳の働きで、顕在意識。反対に、そうしたよりどころなしに覚えるところが、子供の1番おもしろいところだと思うんです。

だから3歳くらいになって、はっきりしている子供では、もう遅過ぎるんです、特殊感覚、超感覚というものを養うためには。その前に入れなきゃならない、0歳の時に何をしたらいいかというところを我々は確立しなきゃならんと思うんだな。

スセディック実子さんの例もありますが -。

七田 私もお会いしたんですけども。実子さんのお話を聞いても、カール・ビッテ、あるいは、ストナー夫人の教育を読みましても、子供を叱らないで育てる、そこが1番大切なところではないか。もう叱って育ててしまいますと、頭のほうに壁ができてしまって、何も受け入れない頭になりますから。

どなたもみんな成功した方は、何よりも1番赤ちゃんの心を大切にしておられる。そこが1番重要なところですね。

井深 カール・ビッテにしても、初めは遅鈍だったと言いますね。

吸収力を育てる

七田 例えば脳に障害があっても0歳から3歳といった乳幼児期を大切にしますと大変違ってきます。

私の関わった事例ですが、新潟の大学の先生のお子さまが、脳性麻痺で、どこの病院に連れていっても、40か50どまりのIQしか育たないだろうというふうに言われていたんです。奥様が手紙をくださって、それから指導が始まりまして、2歳の頃にはどうしてこんなに賢く育ったんだろうというほど、賢く育たれまして、今じゃIQ150ぐらい軽く出しておられる。おじいさんが小児科医さんで、長年、子供を見てきた経験からしても、こんなことはあり得ないとおっしゃって - 。それが現実に、自分のお孫さんで、そのように非常に賢く育った。

井深 残念ながら、ドーマンさんにも0歳の例がないですね。もっと早い頃から手をつけなさいよと、私は随分そう言ったんだけど、ドーマン先生の所に連れて来られるのが、全部遅くなってから来るからなんですよ。

七田 しかし、お母さんの反応も昔とは随分変わってきましたね。講演に行きまして、以前は本当に冷やかな話の聞き方をされるお母様方が多かったんですが、この頃はとても熱心に聞いてくださいます。データが豊かになったというようなこともあるようですけどね。

しかし、スセディックさんの場合には、4人のお子さんそれぞれで、同じやり方でしなかったんですね。大変な工夫をなさるお力を持っておられて、そこが素晴らしいなと思いました。ほかの方が工夫がつかないようなことをどんどん工夫して、子供を楽しませるということを知っておられたので、子供がお勉強を楽しむようになった・・・。

井深 特別利口な子供をこさえようという意図はなかったんだということを盛んに主張しておられてね。

七田 ですから、私は子供の吸収力を育てることが問題だと。

井深 そうですね。マテリアルは何でもいい。だけどそれを入れることをやらなきゃだめなんです。

七田 それをやったということで大変な吸収力が育ちますから。ですから後のお勉強が非常に楽になる。

私が幼児教育の勉強を始めました時に、資料は何があったかと言いますと、古いカール・ビッテのことを書きました本と、その次に見つけたのが、鈴木鎮一先生のご本なんです。才能は生まれつきでないというようなご本だったと思いますね。

終戦直後の非常に質の悪い紙のものなのですが、今も大事にその本はとってあるんです。その本で、私も随分勉強させられました。

井深 だけどカール・ビッテだとか、ウィーナーだとか、今までにあれだけ、ああいう人が現れ

ていて、なぜもうちょっとアメリカあたり本気になって動かなかったんでしょう。やっぱり0歳というところに非常に抵抗があるんでしょうね。それと、お母さんと一体でなければならぬということ。お母さんの力なくしてはできないということが、欧米では、日本と違う事情になるから。そういうものは、日本でこそやらないきゃいかんことだろう、と思いますね。

七田 『0歳』という本を読ませていただきまして、1番感じましたのが、先生の、パターン教育は教育に革命をもたらすであろう、という一言ですね。

井深 木村久一さんの本『早教育と天才』に、早く教育された人は、まる暗記が非常に苦手であるという表現がある。ミセス・ストナーも自分の娘さん、まる暗記術が非常に苦手だと。ほかにもあるんですよ。

そうすると、早く言葉が定着して、理屈が分かると、ただまる暗記というのは非常に苦手になる。だから、潜在意識をうんと先にやって、顕在意識のほうは後の後にしたほうが、人間の能力としては、うんと進むんじゃないかという気がするんです。

七田 パターン教育で潜在意識を高めると、非常に吸収力が良くなる。ということは理解力が非常に高くなる。ですから、論理的な出発は後の話だということになってくる。

楽しく繰り返す工夫

井深 意味とか理屈であるとか、一切抜きにして、ただ機械的に覚えるということに、どうやって興味を持たすかということを工夫したほうがいいだろうと思うんですよ。

その意味というのは、後から自分で、あ、こんなことだったかと発見すればいい。和歌なんかの意味を大人になってから、初めて、ああ、こういうことだったかという人、いっぱいいるんですね。それが本当の教育で、自分で意味を悟らせるというのが教育の重要点だと思うんです。

七田 小さな2歳の頃に藤村の詩を覚えるとしますね。その時には、意味は分かりませんけれども何かを感じる。

井深 詩のムードは分かる……。

七田 ですから、大きくなりまして、小さい時に全然詩を読んでない者は、それを読んだ時にもあまり感銘しない。ところが、小さな時にそれが入っていると、詩の心が非常によく分かる子供に育つ。

井深 ムードとして受けとめているわけで、これはもう胎児からでもいいわけなんですね。

それで顕在、潜在というと、何だろうと思って、抵抗を感じちゃうから、左脳、右脳というふうに便宜的な言い方にしているんですけど。

七田 先生がパターン教育のところで、大切なのは3つのポイントだとおっしゃっていますね。1番が繰り返し、これが大切。2番目は説明や解説は要らない。3番目は結果を求めるのを急ぐなど。私も全く同じ意見なんですけど、実際に指導してみまして、1つ気がついたこ

とがあります。これはぜひお母様方に伝えたいと思うことなんですけれども。

繰り返しが大切ということで、それをやり過ぎると - 子供って、特に赤ちゃんというのはすごく吸収が早い。ですから、もうたくさんというふうに思わせてしまったら、それが1番失敗のもとだと思う。もう要らないという時期があるんですね、絵本なんか。それなのに、お母さんはまだ3ヵ月も4ヵ月も同じ本を与えようとする。

拒否しないで受け入れている間はいいんですけども、もうたくさんという時期がくるんですね。それはちゃんと見なきゃいけない。

井深 それはもう絶対見なきゃいかんですね。

七田 だから親のほうでプログラムを決めて、これは3ヵ月間やる、というようなことではなくて…。

子供が、これはもう学びとってしまったな、飽きてしまったな。だったら、これは卒業だと考えて、次にいかになくちゃいけませんのに、親御さんはそれに気がつかないんですね。そして、この頃は絵本も嫌い、カードも見ない、お勉強もみんな嫌いになってしまったと、こういうふうにおっしゃるんですね。

井深 それは大変なポイントですね。

七田 楽しめる工夫をして繰り返す。飽きないという工夫が1番大切だと思います。

井深先生はパターン教育で何を育てるか、愛、心を育てる。愛や心を抜かした半分だけの教育ではいけないと書いておられますが、お母様方は、こういうことを知りましたからやってみるといふ、つい教えるほうへ、教えるほうへ傾いてしまう。その上子供の心を読み取ることができないから、無理強いをしてしまって嫌いにさせている。そうすると、今度は早期教育が悪いというような非難になるわけですね。本当に子供の心が読み取れる、そういうお母さんであってほしいですね。

急がず、求めず、見つめる

井深 早期教育で、本当に成功したと思えるのは、カール・ビッテだけですね。ほかの人は、ウィナーでも、自伝に書いていますが、自分は決して人から愛される、可愛いと思われる人間には育たなかったという - お父さんが厳しかったらしいですけどね。

七田 まあ、早期教育の例が少ないからそんなことになるのでしょうけれども、今どんどんやっているお母様方の中には十分子供さんの心を読み取っている人もおられます。

それは先生が書いておられますように、結果を急がない、求めないというお母さんなんです。ですから、例えば、言葉が遅くても、あまり気にしておられない。

普通、1歳3ヵ月ぐらいになると、言葉が出ない、言葉が出ないと言って、やきもきして、心配をし始める人が多いんです。

井深 そのやきもきが全部子供にうつりますからね。

七田 それが全部子供のストレスになってしまいますね。まずそういったことは気にしない。そ

れからおむつをとるのも、のんびりと。

井深 幼児開発協会では、おむつをしないでする子育てということを考えているんですよ。

おむつを上手に早く外せるというのは、子供とお母さんとの関係の問題ですね。

お母さんがどれだけ注意深く子供の態度を読み取れるようになるかという、1番最初のカリキュラムがおむつだと思う。

中国で聞いたら、おむつがないせいもあるかもしらんけど、3ヵ月、5ヶ月になったら、もうおむつ外せますよと。そういう答えでしたね。

七田 今、日本では、平均が上がっているわけですね、とれるのが。

井深 2年4ヵ月くらいですよ。

昔は1年たってもおむつが外せないというのは、お母さんにとって恥ずかしいことだった…。

それはお母さんが子供をコントロールできないということですね。

それにしても0歳という言葉、分かる人にはぴんとくるんだけど、分からない人もまだ多くて…。

七田 そうですね。分からない人は全然分からない。

私の指導している久留米の教室では、お母さんが生まれて3ヵ月、5ヶ月の子供さんを連れて来られるんです。そこで先生がカードをぱっと見せるというやり方をなさるわけです。2ヶ月たちますと、もうカードをとるんですよ、5ヶ月の子供が。それでまずお父さんがびっくりなさるんですね。そんな3ヵ月の子供に分かるはずないじゃないかと言っておられたのが、2ヶ月ぐらいでそうなる。10ヵ月、11ヵ月という子供が、コンピュータ的な計算をぼーんとやってしまうんですね。パターンの能力が非常にあるという証拠だと思うのです。びっくりするような結果がどんどん出てくる。

ですから、もう私に言わせたら、本当に、赤ちゃんは1人残らず皆天才。でも世間はそうはとらなくて、そういう天才もある時期を見逃したら、急速に減じていくんだという考え方にまだなじまないですね。皆天才に育ててどうするんだと。うちなどは天才に育ててもらいたくない、という言い方をなさる。なんかそういうふうに育つと心までゆがんでしまうというふうな思い込みがある。

井深 だから今、後半分にされている心や感性を前半分にすることの大切さが出てくるわけですから。

七田 そうですね、それを強調しないといけませんね。

漢字・日本語の魅力

七田 日本は昔、素読というようなことをやっていた時代には、非常にすぐれた人が育っていった。

井深 しかもそれが、ごく自然に行われてきたわけですよ。明治だの、大正の古い人たちには。

七田 あの頃までの日本の教育というのは、本当に世界にすぐれた教育だったと思うんです。
そういう意味で今、日本の子供たちのレベルは、歴史上最低のレベルというところじゃないかと、私は思うんです。

井深 特に、文化性と言いますかね。その低さときたら、驚くべきものですよ。

七田 先だっの毎日新聞にも出ていましたが、高校生で3けたの引き算ができないという子供が非常に増えているとか、あるいは私が講演に行きましても、九九のできない中学生がいっぱいいるのが、現実だというような話を聞かされます。

そういうことで、世の中が進みまして、習うことが増えて、それを消化しなくちゃならないから、新幹線授業をやる。現実についていけない子供たちがどんどん増えているんですね。

ブルーナーでしたか、習うことが多いから、今まで20年で学校を卒業できる内容であったものを、今はこれまでのスピードと同じでやっていると40年かかると。

非常にたくさんの内容を詰め込んで教えますから、大変なスピードで進むわけですね。そうすると、幼児期にそういう吸収力のいい素質をつくってない子供は、ついていけないということになるんですね。

井深 日本の場合、その基礎に漢字を持っているというのは、すごい大特権だと思いますね。漢字に匹敵するマテリアルというのは、他にないですよ。

僕は、東洋というのは、漢字があつての思想じゃないかとさえ思う。

漢字というのは、非常にあいまいな意味を持っているんですね、1つ1つが。

それが、クリエイティビティとか、いろいろなものにつながるんじゃないか。こうこうだからと、理詰めだけでは、語り得ない思想というものを、漢字は伝えるんじゃないか・・・そう思いますね。

だから、詩なんていうのも、1人1人違った光景を頭に浮かべながら読んでいるだろうと思うんですよ。私が考えるのと、人が考えるのとでは、色も違うだろうし、絵も違うだろうしという、こうこうだと左脳的に決められない、右脳的な漢字のあり方というものを、私はもうちょっと主張したいんですけど。

それは感覚だと思うんです。

特に俳句なんかね。少ない言葉の中から、受け取り方次第でどういう考えでも出てきますからね。

七田 そうですね。やっぱり日本語というのは、非常にいい言葉だと思いますね。

井深 我々は大変な得をしていますよ。

それからもう1つ、我々がはっきりさせなきゃならないことは、遺伝と環境の問題だと思うんですよ。

少なくとも胎児から始まる0歳教育では、遺伝というのは、ほとんど無視してもいいんじゃないかと思うんです。

そうすると、遺伝というのは、どういうところだけが要素になるのかというようなこと

を、もうちょっと詰めていかないと。生まれつきだという考え方が、常識として非常に根強くでき上がっちゃっていますからね。

七田 そうでございますね。けれども、サイエンスが今、科学合理主義一点ばかりからニューサイエンスになって、相互依存性とか流動性とかいったものが考え方の特徴になっておりますね。遺伝というのも、例えば糖尿病の体質を受け継いでも、摂生して、糖尿病を出さなければ、次の世代には、それがもう切れて伝わらない、そういう意味での流動性という考え方ですね。

それは教育に持ってきまして、通じることなんですね。

先生が『0歳』に書いておられますことは、まさにニューサイエンスが説いておることと、ぴたり一致しているので、さすがと思って拝見させていただいたんです。

「全てのことに對して、ものの考え方を大きく変えていく必要がある」「合理主義の行き詰まり、人間をトータルに見なおす東洋思想的なものの見方が必要」と書いておられるのは、これはニューサイエンスの説いていることでございますから、やはり分析的にとらえるのではなくて、全体を見通すということですね。

井深 結局、東洋思想と西洋思想との統合が必要になっていくということですね。

どんな子にでもお母さん次第

井深 お子さんは何人いらっしゃるんですか。

七田 1番上の子を亡くしまして3人です。真ん中の子が今アメリカに留学しています。この子は2歳の頃から、英語のテープを毎日、朝食の食卓に置いておきまして、私がお飯を食べ出すと、ぼちっとスイッチをいれるという形で育てた。

ですから、英語を聞きとるのに全然困らない子に育ちまして。

大学の英文科を出た人というのは数えますと、英語を中学校から10年間勉強することになるんですね。そういう人たちが留学して、分からない、分からない、聞き取れない、しゃべれないと言っているのに、うちのその女の子は1つも困らないでしゃべるものですから、どうしたらそういうふうにししゃべれるようになるのか、教えてくれと言われて、困っちゃうと。自分はただ家でテープを聞かされて育っただけだからと言っているんだそうです。

井深 先生は、0歳教育友の会というのもやっていたらっしゃるそうですね。

七田 ちょうど10年ぐらいになるんですけども、これはお母様方に通信指導というやり方でご指導していますけどね。

目的は、やっぱり子供をトータルに見よう、しつけも、情操教育も、あるいは運動のことも、あらゆる面を考えて子育てしましょうということです。

井深 ただ、本当に気をつけなきゃいけないのは、頭が良くなった、みたいに親が納得するのは、左腦的なもののほうが分かり易いから、つい早くから、ぱっとそっちへ行っちゃう。

そうすると、昔の天才教育をやられた人たちと同じようなことになりかねない。

なるべくむしろそれは抑えて、感性の教育というのをどう育てるかということですね。

中国で教わったいい言葉に、美育というのがあるんです。日本では、芸術とか何とか言うけど、美育という言葉はないですね。

七田 従来の早教育と目的、方法が明らかに違う、と先生は書いておられますね。従来は知的な、それ主眼の教育をしているけれども、そうじゃないんだという -。

私はやっぱりバランスだと思っております。

それで、赤ちゃんが、精神や知力を育てていくというのは、やはり言葉なんですよ。ですから、これは本よ、これは湯呑みよ、これはテーブルよというふうについてあげると、早くから物とのつながりができます。

それで左脳が開けてきますね。それと同時に、湯呑みと言うと湯呑みが、本と言うと本が浮かんで、イメージのほうも開いていくわけです。ですから、人の言葉から入っていくと、両方、バランス良くいくわけですが、これがテレビになりますと、音と映像の刺激のほうが強くて、言葉を育てない。なぜかという、テレビの言葉は単なる音として処理されてしまうからです。

赤ちゃんは、言葉と物との結びつきを持っていませんから、テレビを見せましても、言葉は全然育たず、右脳だけがぼんぼん発達していくんですね。そうすると論理的な思考ができないという自閉的な子供になってしまう。左のほうが発達してなくて、バランスがとれない。

音感教育とか、あるいは理屈抜きの、意味なんか全然関係なく、もう音とリズムで覚えていってしまうというパターン教育というのは右脳の訓練なんですよ。だから、大切なのは、それをしたら、その一方では言葉数をうんと増やしていくようにする。ですから、2歳で250とか、3歳で900とかいったような標準がありますけれども、そういうのは無視していいから、できるだけ、言葉数を入れていく。

カール・ビッテのように、5歳で3万語とか、そのおかげで、論理的な思考が非常に得意であったというようなことを書いていますよね。

ということで、私が特に井深先生の『0歳』で感銘したのは、そのバランスです。大事なのは、やっぱりバランスで、それが壊れるとこわい。いつもバランスで考えたいなと思うんですね。

井深 それと、先生がおっしゃった観察ですね。赤ちゃんの心と体を見ていないとね。

七田 すぐれたお母さんというのは、そこが分かっているお母さんだと思うんですね。今、子供に何してやればいいのか、今、何を望んでいるかということが分かって、しかもそれをやる - そういうお母さんが素晴らしいお母さん。

井深 お母さん次第ですねえ。繰り返しというのだから、飽きたかどうかは、お母さんさえ注意していれば、すぐ分かることなんですね。

七田 それからもう1つ、子供を伸ばしそこなっているのは、私は親の側の制限だと思う。子供

はもっとたくさん、もっと高度なものを与えても吸収してしまうのに、ブレーキかけて、子供をすごく低く見て、それで足れりとしているから、量が足りないんですね、全然。それは親の側、あるいは教える側の問題だと思います。

井深 それにしても、カール・ビッテというのは、すごいですね、やっぱり。

七田 24歳の時に、カール・ビッテの実践と理論にぶつかったということが、今の私を方向づけてしまったということですから。

井深 これからもよろしく…。今日はどうもありがとうございました。

おわり